



女訓

五經



如

訓

五種



女家

庭の訓

作者 紀内侍之事

伴 萬 阿 佛 尼 著 萬 踐 註 釋



此文の作者阿佛尼公は、館五將軍維茂八代の後胤、正五位下左衛門尉佐渡守平康發の女、
安嘉門院の女房にして、四條の局または右衛門佐といひ、後に中院納言爲家卿の
繼室となりて、爲相卿中納言從五位下爲守などを生み給へり。爲家卿の長子爲氏卿大納言
繼家之と不快にして、爲相卿をうしろみて、若泉院を起されし人ふり、其
爲氏卿不孝なりけることは、父卿存生の日、のりこえて官階昇進ありしを怒り給へる
爲家卿の歌、撰集にみえたり。其志わしてゐるべし、かゝれば其領地播磨の國細川の
庄を、はじめは爲氏卿へ譲りありしを、改めて爲相卿へ譲られし證文兩度に及びしが、
爲家卿薨後に、爲氏卿領せられしかば、章論になりて尼公鎌倉へ訴へて、遂に利運に
なりて、冷泉家を起されしとなり。右記録どもに考へ合せて此説を得たり。尼公先腹

つ子を憎まれしといふはよく考へざるものなり、
あづまへ出たつとして此文を贈られし紀内侍といふは、其女にてたはする事は、文の上に
いちじるし、是は此子を生みて後、安嘉門院の御めつとに知られえたるやあらん
此文のうたに、
七つにて御今
参りて参りありしとあるも、皇后の御めつとの女也、
ゆゑも参りありしとたば申し
されどことに見えたることはなし、紀氏な
れは為家郷のたねにはあるべからず、又按ずるに尼公の東くたりも二度見えたり、其一
度は契りし人に忘れられて様々迷はれし間、後親とたのめる人、遠江より上りたるか
へさに誘はれて、其國にくたるよし自記うた、ねといふ文章に見ゆ、今一度は為家郷の
争論により鎌倉へ下るよし、自記いづよひの日記に見ゆ、はじめの度ならば彼わすられ
し人の息女といふべけれど、うた、ねの日記の中に女といふこと一言も見えず、後の度
ならば疑ふ、為家郷の息女なるべけれども、紀氏あり、いづ方にしてもいづかし、猶う
た、ねを此文につきてはかたし疑はしき事あれど、畢竟するべからざるよし、無用の
ことなればしるさす、此文の奥に
ここに注して後考へるべき又後年案ず、凡源女侍共睦女侍共い
ふは、其姓なる例の論なれども、若是れは紀伊といふ呼名にや、然からば不審なるべ
し、

題號之事

庭の訓といふは、孔子の御子伯魚趨りて庭を過ぎ給へる時に、教訓の事ありし故事によ
りて、其の息女に示さるゝにはとありなる名あり、一名めつとの文といふは、此の尼
公安嘉門院の御めつとにて有りし故にや、息女に贈るゝにとりては、いとまかばしき
名なり、故に今庭の訓をもて標題とす、
ついでにいふ、やつかれ先に著せし國文世々へまといふもの、中に、此文のはしつ
かたを擧げて文例とし、安嘉門院へ奉られしなるべしとせるせしは、本末をもよく考
へず、もとより紀内侍殿といふ名も無き本をのみひとわたり見て唯めつとの文とい
ふ題號によりてあやまつて、輕忽の罪は逃るゝ所なけれど、其あやまち題號にもとめ
せれば、今こゝに題號を論するものなり、
なにはめつとのよしおしも思ひるゝわき候はくまでは、憂をも忍びずして御身を去らで
と思ひ候しに、たのみがさまに、にかりぬべく候しと、さやは契りしと見え候て、起きふ
と歎かれ候に、この御文にいさめしめと見え候こそ、あまりにいとをしく思ひ参らせ
候べども、げにさぞ思ひぬ、候ふもと、御心くるしく近き程と思ひだになく、都鳥にこと

とふたよりもまれにかつるふみをのみうらやみて、くもてに思ふこと絶えぬ八橋の名も
恨めしく渡りもやられ候まじき心の中、また思ひぬ、歎きさむらはむするにと、思ひつ
け候へば萬もみうくこそふり候へ、

なにはみことみよしあしも云々

何事へ善惡もといふを設筆は難波の名物なれば言葉

のあやによくいふなり、息女もまだいと若くあれば、萬世の中あかちも思ひ知るゝ

まど立ち添ひてあるべしと思ひしに、別れゆくことをなげきて云るふりのたみがさまざ

まに、伊勢物語の歌今までにわすれぬ人は世にもあらず、己がさま、まゝ經ぬれば此

詞をとれりのさやはちぎりしと、拾遺集あふことは心にもあらで年ふともさは契り

し忘れはでねど、此詞をとれりのげにさざればしめし候らむと云々、たゞれ遠く別れ

参らすればさぞ心もとなく悲しう思ひめさんとなり、思ひめし候らむは、息女も事、御

心くるしくはわが心くるしくなり、我事に御の事つくるは理にたいはきこえねども、

是女天のしどけなき所今も世も此類多し、の近き程の思ひだになくみやこ鳥にこととふた

よりまれに、通なる所へ出たつなれば都々たよりもまれならんことをいひり、伊勢

物語の歌、名にしたはいざこと問はん都鳥わが思ふ人はありやふしやとのかへる波を

のみうらやみてくもてに思ふこと絶えぬ八橋の名もうらめしく、今東に趣くなれば伊

勢物語の東下りの所によりて文をなせり、かへるなみといへるは同く物語の歌に、いと

いしく過さるる方のこひしきにうらやましきもかへるなみかなとあるによりてかくする

せしなり、又八橋も物語にいてたる所なはいひついで、引く所の歌は後撰集にとれ

り、巧みなるものなり、其歌全集巻の部に、うちわたしなみかき心は八橋のくもてに思ふ

こととはたえせじとあり、くもてとはぬみずみ如くしたたかなたへ水筋をわけて田の用水

にするなり、今は思ひしげき事にたとへたり、

かみかたはいかにも三十路にあまり候程の齢にこそうるはしく物は思ひしられ候なれば

たとせかうなはいかにも思ひ定まらぬことにて候なるを、ましていかにと御心くるゝ

候へども、いづとせつもりたらん人よりも思ひぬしわきぬづく、萬にたとなく見参ぬ

せ候ほどに御覽にとめらるゝふしくもやとて、こまかに申し候ぞ、

○たはかた、凡といふに同じのみそちにあまり候ほど云々、三十にもなればせみ

有様もよく心得らるゝとなり、のうるはしく、まさしくといふに同じ、或は好華など書き

うつくしき事をも設筆と書きて正しきことをもうるはしくといひり、所によりて心得

し、のまじでいかにと御心くる候へども云々
てこにまじでといへば、此時年姪が十四五計にやあらん、されども年の程よりはよろ
づねとなくも、道理もわきま、給ふべければ、御心にとまる事もやとまふに申す
をなり、ふし、ふしとは所々といふが如し、
まづたゞ人は心にて候ふ、いかにみめかたちつくしく能世にならひよく聞え候も、心
さだまらうつゝとも候はねば、いたづら事にて候ぞ、御心に心をそへていかに、あ
たまはしく思ひめ、候御事にて候とも、わのすから世にもれきこえて人へもどきそりぬ
べからんことをばふるまはせられはしまし候まじく候ぞ、
のまづたゞ人は心にて候なり、大學に誠意正心をよろづの本とありとれなり、俗にも
萬能一心といへるごとく容顔才能も心があしくては益なし、故に第一に上げられたり、
此下婦徳をとまかにいばれしもよろこしの女訓女誡などいふ書にわさゝたしく教な
り、よく、味ふべし、心定まらば夢のやうなればいづれも皆あつた事のうつゝ、
つといふ事を俗にうとりとしたる事に覺えたるはひがことなり、夢にむかへて現在とい
ふことなり、のうらまはしくたはしめ、候御事云々、
あうまはしくはありたくなり、

いねほどよく、たきと思ひめすとも、自然に世にもれて人のよからぬとそしるべきこ
とばなしたまふなとなり、
人はたゞ年の程より、もたよすけたるがよき事にて候、さればとてわがき程にあまりにたよ
すけたるもにくきことにて候、またあまりにふようめきたるも悪しく候へば、すゝみたく
れぬほどにたたせられはしまし候、
のねよすべ、たとなしやかなるふりのあまりにたよすけたるもにくきことにて候、
あまりたとなしめくも俗にませたるをいふ如く男ならにくきものなり、女はましてす
さまじげに覺申、のふようめきたるも、不用と書くべし、用いたぬめものめくは俗にい
ふうちば過きるめいりたるなどいふが如し、清少納言枕の草紙にもふようなるものと
へる條ありて無益のものを擧げたり、
また手ばかりなほ人たいと覺え候、はかなき筆めすさびにて人の御ほど、心めうちもた
しはからるゝ事にて候、みづし、御草紙などたまはりてわ、せたまひ候ほどにと思ひめし
候べく候、すべらぎの御代つき候まじければ、かこき君にもそのあと、御覽せられま
みらせても、しのばれさせたまひ候はんするつぎにて候、

○また手は云々 是より才能をいふ 第一手ならひをいふなり○人の御ほども 人
からなりのみづの云々 みづしは御厨子と書きて 草紙の類などなく棚なり 天子
より仰にて 其棚にたくべき御本などかゝせらるゝ程にとなり ○すづらき御代云々
すづらきは皇と書くなり 萬葉集の歌に、すづらき御代榮えんとあづまなる陸奥
やまにしかね花さくとあり、天皇の御代しつしまじければとなり、のかしとき君にも
云々 後代の賢王集へ内侍の牛跡と御賢とてしめせ給はんはしとなり、つまはは
しといふに同じいふなり
まんなは女房のすゝみかくまじきもゝにて候へども 歌の題などにつけてもさるさまをも
見しり候はぬさまに候はんするはあまりにいふかいちく候へば かきならひて筆めすざび
にはかゝせ給ひ候へく候へ
のまんなは云々 せに學者めむすみな假字をさしたきて、もろこし人の字を學はす
に、それは石摺などによりたれば悪しからずとみあるを まかき女の通はし文など、
かどしにくなつかしからぬは、心たとりせらるゝもめなり、のさるさま とあるさ
まなりの見しり候はぬさまに云々 眞字をかきだてするは過ぎたり、またむげにえか

かぬはつたなしとぞのすざび あしうひといふほどの詞なり

繪はたてたる御能にても候まじく候へども、人めかたちうつてしくかきならひて 御つれ
つれなりんをりには物語繪などあそはして御覽し候へく候へ かまへてし歌よそはし候へ、
女房めうたはあまりにいとしくてみがきくたせるかたなどは候まじく候へさればとて
艶なるかたにひきとられてたまひの候はぬもわるく候へ
○繪は云々 畫は面だちたる藝にてはなけれども、なき給ふべきなりとな、○物がた
り繪 歌物語の中にあるべき繪なり、今俗に源氏繪などいふが如し、○かまへてし
歌よそはし候へ かまへてしと端を改めたるは、繪の類にはあらわ、かならずよ
み給はでかなはぬとありとぞ、の女房めうたは云々 源氏物語に、すゑ摘花の君、
父君めかきわき給へる歌のさいのうを、源氏の御許に進じ給ふを、源氏姫君の御學問に
用なからんとたまふも此心なり、契沖阿耨梨きくやいかにはうはみ空なる風だにも松に
音するならひありとは、といふ歌を評して、初玉文字、女めことばにあらわといはれた
るなど思ふべし、小町歌はあはれなるやうにてつよからずといへるこそ女の本體なる
べけれ、凡歌にはかきうす女たらん人はよるづに此用意を忘るべからずとぞ、枕鶏の晨

といふも女の男のわざするをにくむたとへなり、のみかきくたせるかたどは候ま下く候さればとて云々、くたせるは腐のまなり、すみてよむべし、くたせるとはものゝ過きたることなり、ことごとくみかき過ぎしは女しからず、さうおれはとて、また艶なるかたにとられ過ぎて、一首の心たしかあちぬはあゝとなり、つたまして、歌のころをいふ、

歌の姿れもむきはよるのつるにこまかに申して候、御覽候へ、あやまりて古今新古今など、歌は覺えさせればしまし候へ、かんとす、め申し候しをものうかに思し、めし候へ程に、御心くるく候て、いひても申し候はぬ、かまへて御年み加はり給ひ候はんにつけても、御心に入れてさらに覺えさせればしまし候へ、

のよるのつる、夜の鶴はすなはち又尼公の作にて是よりさきに御息女へかきておくられしものなるべし、のあやまりて、車下の詞なりの古今新古今など、歌は云々、古今は歌の本體あり、新古今は此時近き御代の勅撰にて専ら行はるゝものなれば、必そ々にて覺えたまはるべしと勸めらるゝを、耳若ければものうくせらるゝあり、の御心くるしく、これもおわが心くるしくにてそのことさきに云へる如く文めしとげふまなり、

源氏世繼などさるべからむものをばひわたり御覽候へ候へ候へ

の源氏世繼、源氏物語世繼は物語なり、世繼は則榮花物語の名なるよ、水戸安勝爲章の考より、赤染衛門の作といふことも非かとなり、其論事いげ、ればこゝにいはず、

箏の琴はわきてあはれなるものゝねにて候、五の年よりならはしめ参らせ候へばおひし、せにて御いまゝ、みりの夜も院の御前にてひかせたはしまし候、またハの御年とればえ候、春宮の御琵琶にあはせ参らせなど、すでに御名をあげたる御能にて候しかば、いよゝ上へ名をとり給ひて、ひかせたはしまし候へ候へ

の箏の琴、十三絃を箏のことといふのわきてあはれなるものゝねにて候、いろゝものゝ音の中にこと更に面白きと思ふなりのせにて御今参り、七歳にて内へ参られしなるべし、の院の御まゝ、仙洞の御事なりのすでに云々、既にとは過ぎさりしことをいふことはあり、此時に名をあげたまひしうゝはいよゝ上へといはれ給へとなり、

また人にむかひてなにのすぢもなく、せつぎみせより今の世までことばもつゝかず時代をもしらぬいたづらいとふどねはせられ候まじく候、のまた人にむかひて云々、時代へ前後をもしろしめさずは口をしきことゝもなり、せ

繼物語は延喜より堀河院までをいつづけたればそれより後も當御代までもたこかにし
り給ふべしとなり、是則學文なるべし、

また御する人多くていたづらごとふるすゞる文しけんかきはすことよからぬことにて候、
はなやかにえある人はきほことにまさりかてあるやうに候へども、たちかへり見候へば
いかによやみぞめせぬやうは候はぬぞ、人にはこからずかすかすしたくからずとはか
ずふるまはせたるはしほし候へ、

の御知人多くて、ちかづきなりりのすゞる文、正しからぬなり、今も狂人を心の
そゞるなるといふにて心うぐしのはなやかにえある人は云々、すべて花ししくは

えある人はふとあひて人よりも人きは目にみあるふりなれどもよく立かへり見れはう
るさく見ぞめするは世の常あり、此段ことに女のみならず、男も心をとりむべき所也、

あつからず寒からぬ春め来つ候はよき時節なり、人の文もかうぞありたき、君子にむか
へば春風の中に座するが如しといふも是なり、の凡人に交るは是には濃からむや淡から
むやとたゞしに考ふる事は叶ふべからず、唯常のこゝろえあるべし、晏平仲善與人交
久而敬之と孔子の宜るをたもふべし、高きも賤しきも人にまじはりてこやまの心あ

れば過不及のとなかりまし、
御する人も御心をえひてたはせかはし候へく候、すかともなき人にむかひ候へばその人
にこいつやうにいひふされ候へばあさましき事にて候、さやうの人はにしにいけには候は

で、御心をうちとけさせたまで候まじく候、またさるべき人などまゐりて候はむに、あま
りにもの遠く春日野の雪のあした賀茂の社の川あみなどのやうには候まじく候、

○御する人も御心をえうひて云々、朋友をえうふは子をえたる親めなど第一に
心すべき事ぞ、荀子に麻の中のものきのとへをあげ、如く直き人に交れば自ら直く

なる、又其人を知らんと思はし先その友を見ふと孔子ものたまへり、よからぬ人に交は
りて其人とひとつなるやうにいひふさるゝは口をしきとあり、さればとて憎ししく

あへしらはんは情なし、唯心うちとけずといふ所に目をつけ候べし、春日野の雪のあし
た、○賀茂の社の川あみななど云々、加茂春日と相對つて古歌の詞にも、遠くはつ

かなるゝとの餘情にいへり、春日野云々は古今集の歌に、春日野の雪間をわけて生ひ出
しる草めはつかに見えし君はもとあるにふり、加茂の社云々は源順集に、はつかにも思

ひかけてはつたすき賀茂の川あみ立ゆらしやはとあるにふれり、朝の幸と社の幸とは

歌に無ければ今は對語つしうに入たるあり、
御おほめきどろしづかに几帳のはづれ申さしやうに御入候べく候、ひぢもてなし
と、さやうなどはうたてしく候、人々みすみはちかく居よりたれが冠の額かれ
お勤めなど申し笑ふ事なと候はむに、ことば加へさせ給ひ候まい候、あやまちて後
にも何とか申しつるいかゞなど尋ね申す人候は、いざ何とやらもちぬとをいひし程
に聞かすなりぬるなどはかおげにたげせなすてし、
○さちやうのはづれ申さしやうに云々、申さしきはめとやかなるあり、昔はしかる
べきせの對面は必ず几帳をへだつるなり、親兄弟の間にも几帳をよせらるさま、源氏物
語などにて見るやし、とのさまや、几帳はづれてうと、しかる繪にていはゞ半面
美人といふさまなり、のたれが云々、侍ふ女房などの出入人を見てうはさをいふなり
のことは加へさせ云々、其よしおしに詞を添へ給ふまじきとなり、○後にも何とか申
しつる云々、其うはさしたる後に其時何と申しつると尋ねる人あるあり、壁に耳、
石のふいふたとの如く、もれきつて尋ねかゝすなど常にあることあり、○いざ何と
やらむあぬことを云々、いざは知らずといふことあるぬことは俗にわけもあき事い

ひの意なり、○はかふ、明にとり、所さきやうにいひあすあり、
人の心程はたそろしくうちとけにくきものは候はぬぞ、何の道に車をくだき何の流に舟を
うかべたらむよりもと申しならはして候へば、よく、やうあること、思ひめ候へ、
○申しならはして候へば云々、うちとけにく、たそろきと立ちかゝりて見るべし、
是よくわけあること、思ひめせとあり、○何の道に云々、白氏文集第三大行路曰、大
行路能推車、若此人心是坦途、巫峽之水能覆舟、若此人心真安流、此語をやはらげて書
けり、何の道何の流といひかすめたるは源氏にふじの山をなにかゝつたけと書ける例な
り、女もよくなくはかしくあつたきあるべきもめなり、ついでにいふ、後世にも此
詩をとりに兼好のうたせの中をわたりく、つて今ぞる阿波のなるとになみ屋もなし
と、つり、又頼阿の歌にも山川やくだすいかだにこすつなの心するさぬ世にこそありけ
れとあり、いづれも心ひとし、
窓の中ひつにかしづかれて親のたきてにしたがひて世をすくす程は早く候ぞ、かたはふ
ることをばひきかくし、よにもれ聞えてよかるべき事をばまなびいで、人に聞かせなじし
候へば、よろづ心に、候ぞ、常ならぬ世のなすひ、頼みし松も枯れはて、下葉ちりあ

く、受竹のたがせ々にたひわれ候後は、世にふるたつきもまれに心付そき事にて候、
たの御身近く朝夕めしつめはれ候人のみ聞候はも事かよにもれ聞え候はんするとたけしめ
し候へ、遠き人へのを申しさする事は候はめ事にて候、
の意の中云々、これより心に、候そまで源氏物語のいささめによりてかけり、つ
たやのたきてに云々、親の定むるまゝにしたがひて過す間は心安きあり、○常ならぬ
よ、物掌住ならぬはせめふらひあり、○たのみし松も云々、竹のよとけ生あかれと
つ、けたる皆縁の詞あり、此段の心は頼もしき親兄弟も生別死別ためかさまくになり
ぬる後は、世にあるたよりも少なく心はそしとぞ、此以下上たもふべき所ありすべ
遠き人はうろしめことを伺ひしるべきにあらず、平人へ上にくだいていはいしもと
はしたの棠に見聞くことを持ち出ていふが世間のさたになるとあり、
宮仕も程につけて人にきこるひあらそふ事にて候、とにかくに心くるきあざかふと見候
し程に、また二葉より思ひ定め参らせ候事も候はざりしかども、身のみずならぬにともふ
ひて、山がつにてはてさせ給ひ候はんするもさすがにあたりきやうに覺え候ても、も
しきの御まじろひも心ならず思ひ参らせ候し、

○宮仕も云々

高きもひきくも宮仕すれば人にあらずひやすきといふのきこる

輾の字の意にて車めきくる如しにあらざと筆ふあり、文字にて凌轢といふが如し、○ま

だ二葉より、もと草のはじめ生ひ初むる時は二葉なるにたとひて句をいふ、歌に多き

ことなり、○身の數ふるぬにともなひて云々、親のわが身の人數にもあらぬにつれて

山腰の如しうづもれてはて給はむことめをいさなり、○あたうさ、俗にあつたらと

いふ辭なり、○百數、禁中の御事なり、も、しきの大宮といふがもとにても、しきとば

かりにても禁中の御事となる、伊勢御の歌にも、しきとばかりにて禁中の御事とすれば

くしきことなり、も、しきの詞の義は發言を注したる燭明抄、冠辭考に説くあり、こい

にもらす、○御まじろひ御まじりなり、○心ならず、不安心なる事にて俗にいふも

同ト、

きみの御覺あひし、く候はんにつけても、爭ふ人など候ては御心くるしく候はん、また
數ならでましのぼる夜の數遠くあるかあきかもしられ参らせ候はぬやうなることにて候し
も、いかでかたけなき君の御事をと思しあして、うらめしげあるを、つちも見え参らせ給
ひ候は、二歳も三とせも色もかはらでさふらはせ給ひ候へ、

御寵愛かひあるさまなるをいふ、つあう々

寵をねたみ争ふ人ありては心づかひなさん

以下がまづ
られぬ時の
ことをあ
るまじ
とに教へ
る

ましましといふ詞に、めばるは禁中によ

数
ま
す
く
遠
く
な
り
お
く
な
り
○
い
か
で
何
と
か
せ
ん
あ
り
つ
か

勿體なき天子の御事なればと思えられよとなり、口の中もみえ參らせ。

給ひ候はでうらぬし景色すこしもなきなり
のちも木はらで同くさまであられよ

となり
和泉式部
夫和泉守道真に
わすれける時
赤染衛門いさめ
の歌に
うつろはで

しはし
しのだ
み森
をみ
よか
へり
もぞ
する
とす
のう
う風
とよ
めろ
も思
ひ合
すべ
し心
が
る

き女は後悔の事あるべし、此趣源民の品さだめにも委しくいへり、

ほうき御心の程をもみさだめ参⁵せ給ひなばさるべき
いにてまうでさせ給ひて、

り
ぎ
ち
と
し
ぎ
よ
し
を
う
る
は
く
奏
せ
さ
せ
御
さ
ま
う
ち
め
へ
て
入
づ
か
に
御
テ
ひ
奏

そむくとち
うは障りなくねがはせ
たはしませ
うきせには思ひでなく
後入せよ音きこ

御事ごことの
あまりに悲しく候ぞ
宮重みやしげひと、
ミロもち参まゐり
せ給たまひ
矣やはいこなく

さめてすぐさせ給ひ候べく候

○なほうき御心々程をも二三半堪忍ありて後（れなき御心を更さたぬ給はなり）○

さるべき席して云々
しかるべきをりを見て寥内したまひてなり
○かきみたり

心地をよきにて病氣しきりなるよし
たゞしく奏し給ふとなり
○御さまうちかへて云

々
尼になり給ひしづかに
佛法の修行おれとなり
のそむくとなすは云々
かたちを

そむくと
なうは
其形にて
一向うき
せの障を
離れて
願ひ結へ
なうか
みにて
は今世も
い

けるが、ひなく
後世は又無明の暗に迷ひ給はんこと、俗にいふ一もとうず、二もとうず、に

て悲しきことなり
若しその腹に若宮い
で給はばまたそれを
御心の慰めにさにて
帝の

御つれなさも其まゝにて過し給ふとなり

るき人ない夢りて、あり御いたはし。御住居や、たればかゝこゝへ行きていみじき事侍る

れ
かれはい
づちにこ
そ心安さ
すまぬ
なれ
なぞ申す
め候はん
ぶる
あなかしこ
あ

し
し
う
ま
の
御
に
に
候
ま
と
候

の
 ぶ
 る
 う
 人
 な
 ど
 云
 々

 み
 め
 ど
 め
 御
 つ
 れ
 な
 う
 に
 つ
 れ
 へ
 と
 過
 し
 給
 ふ
 所
 へ
 ぶ
 る
 く
 と
 ひ
 な
 れ

た
る
人
な
ど
き
た
り
て
悲
し
み
つ
ゝ
世
間
の
人
の
上
を
な
ぞ
う
に
い
ひ
出
る
な
り
、
是
今
の
世
に

も常にある事なり。おなかしこ。あ、たそろしにて禁ずる辭（新）なりといふに同じ、
あなかしことはいづくに用ゐるもあ、たそろしに心なれども、語のほかにかく用ゐる
時は禁ずる詞となり、語の終りに用ゐれば恐惶とかくに同じ、つゝみて申すなり。○
あはししき。かろふなる心淡々とわくなり。○尼公の自記うたゝねに見ゆるたも
むき。深く契りし人にわすられて北山の麓の家にて夜中に人しれず髪をそぎたい獨り出
て、西山法輪のわたりなる尼の庵に遁れ入り又病によりて愛宕の近所にうつろひなど心
かろき振舞といふべし。かゝりけるにこりてこゝに戒められなるべし。
佛にも縁を結ぶ水にも草にも契りたきたることにて候へば、それがさるまじきにて候はね
ども、見ぬせよりさるべしと定めたきたる宿業のこゝを去りかゝりて行き人かはり所あり
たまり候へども、それによりていみじき事候べしとも覺え候へば、たいかすかなる御す
すまゐにて、むぐらは西東の門をたち違は軒をあらずひて、たれふみわくるともなき庭の
あさぎをながめても、親のなごりといまれば榎の榊もなつかしかるまじきと思ひ候へ
し。
○佛にも云々。前には定めて佛にも縁をむすび水にも草にも契りあるべし、六道の生

輪廻の因にて此世にて、かこしと行きと、うつりて善きあしきの果をくらめはるある
まじきにてはなけれども前の詞をうけていふ、いかしよきもあしきも前世よりさあるべ
きと定りたる我業なれば、いづかたへ行きてもそれがよきともたば、生死禍福たの
が分ありてとやかとするにはよるべからずとほりの宿業。何事もむかしゆゆと思は
ずはいかに此世をうらめば、よしといふ歌をかけて思ふべし。むかしは過去の業因
をいふるたにみすかなる御すまゐにて、外へもうつら故郷のみかすかなる住居にてなり
しむぐらは云々。これよりをとれば、むし候へといふまでは、源氏よもぎふの巻のた
もかぐ且詞をとり用ゐたり。蓬生（新）の巻にみさちは庭のたも、見えすけり蓬は軒をあさ
そひてたひのぼる。蓬は西東の門をたち違は軒をあさ。又かくたそろしげにあれぬれど親
みみかげとまりたる心地するふるき住處と思ふになぐさみてこそあれ云々と見えたり、
のまきのみほし。此詞は植柱の巻の歌をとれり、その歌今はとてやどかれぬともなれ
きつるまきの柱はわれをたるな。
あれぬくさやみにぞ送ふらん。いかでその光をとれば、むし候へ。いくばくも候まじき
せやばみなさと思ひめて、あはししきまの御事候まじく候。海龍王の后とかやあづ

むきけむやうに思ひ参らせ候し親の心むけをたかへと思ひ候べく候、いく程あるま
いき世はたに心するからでありなん、なみらん後ばともかくても申し思ふ人の候そ
世にひが事とわはえ参らせ候、肯をは埋めども名をばうづまふと申すぞかし、なみらん後
のうき名はば今のばより心するべきと思ひ候へ、
のわれ申す云々、子故のやみをはるけぬべき光を見せていろ、いよさましき振舞
をい給ふなり、凡男も女も身み正しければ親の名をもあひるなり、是を光といふ、
心のやみは人の親の心はやみにあらねども子をたもふ道にまよひぬるかふ、此歌より多
くいひなれたり、海龍玉の石云々、源氏若紫の巻によりてかけり、若紫の巻に良清明石
入道の娘をかしづくことを語る所に、わが身のかくいだづらに、いづぬるだにあるを、此
人ひとりにしそあれ、たもふまことあり、若しわれにたくれて其志とげず、此れもひ
たきつる宿世たかはし、海にいりわし常に遺言したきて侍るなど聞あれば、略人々海龍
玉の后になるべきいつきむすめあり、心たかくくるしやとてわめふ云々のあざむきけむ
様に云々、あざむきは常にまじすといふ俗語のこゝろあるを、こゝは彼入道の心た
かきをあざむけりけん心に用ゐる、〇たかへと思ひ候べく候、彼入道に同じくい

つきかしづきたもふなる親の心むけをたかへと思ひ候せなり、いく程あるまらう世は
云々、世なみの人のいくほどなき命のうちたゞ樂に過せばより死て後にはまよといふ
ともがうはひがじとなりと其子細を下にいふ〇骨をばうづめども云々、自氏文集に龍
門原上土埋骨不埋名とあり、これは自樂天其友元稹をいたむ詩なり、此以下肝要の語な
り、よく味ひて心にいとむづし、獸は死して皮をとひ女人は死して名をとひむとい
へる語もあり、
中頃たるちがひ候て、親しきにも疎きにもうらみをなきて、ある山里に籠り居たる事候
し、ある心づきありまにて、御しとをたかくなはしくかしづき参らせ、あうき
風にもあていふすまをかさねても、猶寒き夜み衣やうすく思ひめすらんとれば、泉の
水ささくくしてもあつき日は扇の風ぬるきことを心くるしく思ひ朝朝にたきては花み
うけたる心地にて、なほ常夏の花のにはひもすくなく、うば玉のみみすぢにちひろ
を祝ひてもなほあかぬ心地にて、いかで萬の人にいたはりかしづかれ、みないとをしく思
ひ参らせん人もがなと思ひ候しに、心もつき命もをこから覺えて三とせを過ぐし侍りし
に目に、見えぬ神佛をたじけなく恨み参らせてあかしくらし候しに、うき世のさまは思

ひりて、さる御心すまゐなどは御いたはしく候へども、くだれるさまに身をもてあずく
も心のまゝなることはすくなき事に候と、ふかく思ひめしとりて、とかく御身をさす
つさせ給ひ候まじく候
のちがひめ候て、問違ひの事にてなり、ちがひはたがひめといふも同じ、源氏物語に須
磨のうつろひの事を後にかたり給ふ所に、中ころるたがひめありてとある詞によれり
のうらみをなくして云々、世のうらめしさに山里にこもりしなり、これは尼公の仰うた
たねといふ文にかゝれし時の事に似たり、されどそれには女めきた見えあはづぬ、
のかたくなはしく云々、かたくなしいふ詞にてこゝを大事にといふ心なり、これより
下巻愛の心甚しきをいふ、失矢のさまなりの猶寒き夜の云々、右歌の詞による、六帖
の歌に夜やさむき衣やうすきかさゝきめ行きあひめはにに霜やたくらんとあり、
のいづ
みの水云々、夏のさまなりのたきては花の云々、たき出ては先よるにびみるなり、
のなほ常夏の花の云々、源氏はいさぶ定の所に、咲きまゝの花はいづれとわかねど
も猶としなつにしくもめなきといふ歌あり、此詞をとれり、花のひうけたる心地に見
れどもあかぬにはひかなき心地するなり、のうば玉の髪の手ごじと云々、源氏葵の巻

に、ばかりなき千ひろの庭みるぶさのたひ行く末はわれのみぞ見んといふ歌あり、こ
のみるぶさも髪のこととたとしていかも祝の歌なれば、意を得てあやどれるなるやと
友人某考へ出せり、のいかてよろが人に云々、以下は何とぞ衆人愛敬あれかしとわか
ふなり、のみとせをすぐし云々、山里にて三年を過せしなり、のかたけけふく、勿體
なくなり、思ふ様ならぬにつきて恨みまゐるなり、のうきせめさまは思ひしりて云々
自身人を恨みて山里に住みしによりてうきせめさまは思ひしりて、其方にも寵をうし
なひてかすかなる有様はいたはしく思へども、それを憤りて身を持ちくすす人とてもま
まならぬとばなせなればよくし思ひとりて堪忍し給へとなり、の御身をさすう
云々、さすうは俗にさすもちくづすの意、左遷をさすうといふに同じ、
あてむさめても御行末などまでいみじきためにひかれさせ給ひ候へかしと、こと事なく
思ひ参らせ候、春日の神もいつはり申すこと一は思ひめし候はじ、たゞいく度も申すやう
に、人は心にて候なり、御佛事などせさせはしまし候はん時は、あまねくそゝかせたは
しまし候へ、ひとりとわけて供養する事あるまじく候、無縁にて候はん者をあはれみ
たはしませ、

のいみじきたみに
よきたとくにひかれ給ふなり、の春日の神も云々
こゝに
春日の神をわけられはひふかし、此女爲家郷のたねなうば藤氏の祖神なる故にさもあ
るべし、紀氏には似つかはしからず、又尼公も平氏なれば此神によしなし、是につきて
いへば爲家郷の息女を紀氏の養子にして内へ参らせられしおこるべからず、後考紀氏と
いへる呼名なれば氏姓の論に及ばず前にもいふ如し、つたゞいく度も
とをいへり、故にこゝに幾度もこととわれりのおまねくぞ、かせ云々
一切に供養す
るが功德ぶかきなり、のひとりをとりわけ云々
あが心ざす人一人をなり、のなほ無縁
にて云々
無縁の慈悲といふことは佛法の肝要なりとぞ、
たはかたかななるたふときひとしかしこき僧ふど申すとも、ことしげくたはせかはすこと
あるまじく候、御佛堂など候はん時は、ことししき佛の御前にて人々多く御前にさぶさ
はせて、一日に一時もさだめて戒をもうけもたももせさせたはしませ、かりにもそのひ
じりこそが御所の御歸依などいはれさせ給ひ候はんはあさましきことにて候べく候、
ものしりたる尼たちたはく候ふはなつかしきのりの師にたのみたはしませ、
たはかたかなふる云々
是佛法の供養をいふにつきて又女めたくなみをいへり、おも眼

をうぐぐし、男女のへだてを大事にするあり、女めたくなみ第一あり、孝謙天皇の御前
の道鏡を愛し給ひぬ、如き、ぬ亂の事僧といふ御断にて中へ出あづし、或ははじめは眞
の心にて歸依よりたこり、はてはみだりかはしきに及ぶことたぬし多し、九和物語など
に福島の僧ありさす全く凡僧にあらねども思のほかにみたれたるにてしるべし、今の
世平人の上にとりてはいはば、説法佛事などいげく寺を詣て、それより僧にしたし
あうぬうき名を流す事多し、夫にたくれし女などよくしつこむべし、の御所の御歸
依よなど云々
此所眼をつくべし、つものしりたる尼たち云々
師法にてはあやま
ちあふんも又あふ名たへんもはかりがたし、あまのうち物めりたるをひいて頼み給
へとなり、
また君へ御心かたけなく候はゞ、いく程も候まじきせなからず、いかゞはせんにて御な
いさみ候べく候、御たきものなど合せられ候はんにも、御心をとめて御覽せさせ給ひ候へ
人に給はりせ候はんにかうぐと、めぼらふおと候はんはいだされ候まじく候、其御にはひ
など人のまねぶと候はんはかきませめにほひにて候はゞ、いかにもうつくしく候は
んするをいださせたはしませ、御扇なども見所あるさまに御心の末めく様にてもたせ

たはしまし候へ候

のまた君云々

これよりまた立ちかへり寵愛を得ることをいふ、のいくほども云々

長からぬ世に佛法のつとめと思ふまゝになるやからねども

いかんはせんて過さ

れよとふりのさで御たき物など云々

是より物ごとの拙なやめやうにし給へ心ば

へ用意を示さる

薫物は昔は甚だ心を用ゐて大事にせしことなり、今の如く伽羅の類の

香木をさながら用ゐることはなかりし事なり

故に梅花荷葉黒木侍従などの名ある方多

し、源氏に注などにもあまた出さるればこゝに委しくいはす

人のまねぶこと候はんず

れば云々

真の内侍の御方などして、人のまねぶともあらんに何のうともなく分量

大いを論せぬまきまのにはひはあしきあり

の書

和歌筆薫物のことまで女のあつさるべき藝残りなくしめされたれども、女功のこと

にたきては一言も見えず

是は此時代の風俗にて高きまゝしる人は此事に與からぬ

なるべし、しかれども昔雄略天皇の御代后妃に親ら榮より蠶のこを勤めし給へるこ

と日本紀に見え

又後世の物語づみにも、緯の業染る業は必ずる女の能として、いやしか

うぬ際の人も見あつかふ趣に見ゆ

もとよりもろこしには上皇后諸嬪より大夫士庶人々

妻にいたりそれしのはどらひありて

上々は祭服をといひ、下は藝の服を纏ひ縋ひ

とめをしゝあり

されば曹大家の女誡にも此事をもちにいひ、たとひ上にお上にもあ

れ、此事のすたれたるは後世の弊風といふべし、まして士庶人の妻子は先何よりも是を旨

としてたなばたの牛にもたさうし

龍田姫にもたちこえんと心ざすべし、此文見ん人こ

ろ得よれかことついでにいふ

なほ露枯の前載の冬の景色は御

心にてめて御覧候へ候、かれの景色ほどあはれなるものは候はぬぞ

近き前載に

もとりあき植へて御覧せよせ給ひ候へ候、返すもたいはかなき世のなうひをば花

鳥につけても思ひめしよそへて、あはれに御心をつけられ候へ候

の春の花以下は心の風雅を教へ給ふなり

春の花秋の紅葉はたれも愛するものなるを

世間にちかひて既はじとはなくとも

其上に猶人の心をつかぬ冬花のさびたる景色を

心にしめ給へとなり

是一等高上なる心ば、萬の心もちにわたるべし、誠のしほは

う情はじゝにあるべし

の袖ふれしとは云々、古今集の歌に、色よりしかこそあは

れとたもほわれたが袖ふれし宿の桜ぞもとあり

此詞をとれり、の枯野の景色はじ云

云 柳の草子に枯れたる草の中よりりんだうの咲き残るが見えたるをかしきことに
にいりし類ふりのちかき前衛にも云々 冬枯のれもしろかるづき草をことに植る
給ふとなり。のふすしもたいはかきせのなりをば云々 無常に入るは風雅の
もとふり 此心よりよろづ慈悲の心もたより悪しき念も良き侍る よそへては古今集
に 色香をば思ひもかけぬ花つねふらぬせによそへてぞみるといふ歌あり、この
歌にていりり
五濁惡世のあれら輕慢懈怠の心しきりにすゝみたれり候をばうはんと思ひ候へ
妄想は庭の草へ如くにて、いかにすきすて候へども根がたえぬもみにて候を、いく度も
心にいれて鋤き捨て候へば、げにはしげからぬも、つて候如く、すぢあき妄想妄念たこ
り候は、打ち掃はせ給ひ候べく候、うきことといみじきこともうたゝねの夢にて候へ
ば、それと思ひぬしりて何事もはかなき世に御心をくるしめ候はで、佛の道をいと
ませたはしまし候べく候、思ひ出候まゝ、萬のこと申しつゝ候ぬるをこしき事もい
かに多く候はん、御覽せられてやがて火に入れさせたはしまし候べく候あなかしこ
雲井はるかにへだつ方より

紀の内侍のい

○五濁 五濁とは劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁なり、此世に生るゝ人此五濁をまぬかるゝ
ことなし、是を離れたるを無常或正覺といひて佛の位なりとぞ、このまうがうは庭の草の
如くに云々 妄想みだりなるれもひ夜書止む時なし、衆生みなしかり、庭の草のた
とゝ求めて佛經にもいであることなるやしのをこめしき、まをがましきに同じ、異本
には即ちこがましともありの火に入れさせ云々 此文を火中にいれて人に見せ給ふなと
車下の詞ふり

消息

徳川家康

一筆申入候、先々日増に暖氣に成り候て暮よく候、其御程彌事、若座も息才に候哉、
兼度候、冬年ハわるゝと御目に懸り候入候、其節門何南所、御世話とも、夫後の樂
に御座候、能々此段表へ頼入候、
一竹千代國松殊之外成人候入候、夫に付先頃其地に參候節、竹ノ附人之事被申付候様、
申置候、定而被申付候と存候、
一國事は一體殊之外發明成生れ付、付、重疊之事、其御方別而御秘藏候由、左様可有之事
に候、夫中へ存寄申入候間、能々御心得生立候様に可被成候、
一幼少之者お發に候とて、立木の儘に育候得者、成人の後氣随我儘者に成り多し、親の申
事も聞かぬ者にて候、親の申事、聞かぬやうに成候へば、仕候者、申事は、猶以之
事に候、左様傳付、後に國郡を治め申事は、切置、身も立申さぬやうに成候、一幼幼少之
節何事もすれば成者に候儘、いかやうに窮屈に育るも、最切よりの仕付次第に而、外より

り存るは、太儀にもふく候。是を植木にたとへ候得は、初め二葉にかい割候節、人の
生立と同事致。随分養育致候も、はや一二年も立、枝葉多く成候節、添木をったし、直
に成り候様に結立、其内より枝はかきとり、年々右之通り年々入候得は、成木の後す
く成るよき木になり申候。人々其通り、四五歳より添木之人を附置候も、あしき枝は我
儘に育ぬ様にいたし候と、後すくに能く人となり申候。幼少之時はそだちさへ致せは能と
心得候も、我儘に致置、事項に成りて、急に異身致候も、我儘のあしき枝計りしけり、
本心本木はうせ候事故、直り不申候。是に今以存寄候事有之候。三郎出立之節、年若
に而子供珍敷、其上ひかへす申へ育さへすれば能と心得、氣つまり候事致させず氣儘
に育、成人之上急に色々と申聞候得共、免角幼少之時之行儀作法わろやかに拾置、親を
うやまはする事を不存心惡敷存、後は親子あうそひやうに成り候て、毎度申ても聞入
ず、却て親をうらみ候やう成行申候。夫にこまり申候儘、外の子供は幼少より我前にて
行儀作法能仕付候者、申付置、若少しにても不行儀我儘之事は、我等へかくし不申、逸
々申聞せ候様に申付置候も兼置、我等の前に出候節は、毎度或はしかり、又は是はかや
うには致さぬものと申聞候故、影日向ふく直に育申候。第一親をこはく存候得は、慎み

もよく、幼少より親へ孝行致候事を、能承り候様に申事、第一に申聞候、親の左内は頂
候とても、親之居ぬ時節にあり我儘にあり、國郡を失ひ候者、古より多く有之候。免
角常に側にてる仕候守人者第一孝行と天命と、下を慈悲をかけ、武家の事幼少より申
聞候得は、自然と身持能成候者に候。君臣と申事は定り、事に候得共、君たる者は、臣
臣と心得申事、事一由、我等幼少之節、阿部大内藏毎度申聞候。大臣として君に仕へ候
事故、いかやうに無理ある事を是非よく承り、無道の君も仕候得共、夫にてはま
かの時に用立ぬものとて候。免角上よりは何事によらず慈悲をかけ、勲負偏頗なく、賞
罰を正敷、臣を君の元と心得候得はよく候。臣有ての大名あれば、召仕者あては、
大名の詮は無く候。免角幼少のものには、召仕候者の申事を能く聞と常に御申聞せ被成
候事、專一の事に候。人々人を鏡みとして、身を正敷候外はよく候。
一我儘にて、終に我願望叶事決あき事に候。第一我儘にては、親を恐れず、親に先限る
れ、第二親にうとまれ、第三朋友にうとまれ、第四召仕候者にうとまれ、第五願事とし
し望叶はず、七五ヶ條之通り、ことごとく成行候得は、身をうらみ天道を恨み、後
に煩はしく心亂る、より外無之候。幼少より物事自由にたため事、能く心得申度事に候。

一大名は、總領は格別、次男よりは召仕へ者同様、心得候事、常々申聞せ、首候時より能く心得候様に、くれ、可被申候、總領より次男の威勢強きは家の亂の元にて候、

一幼少之節、萬事たけふように、輕き者人物言まねぬやうに心得候事、夫ともおまりたはやう過ては、却て下の情にしくはゐらず、慈悲の心うすく成申候、常々へ遊に、國の名

産の事、或は入名の家筋家柄の事、並家來共、おれば何れの代よりの譜代も、何の節牛柄、何の節高名等致候子孫など、咄致候得は、幼少より家中の者の如才にならぬ事共

聞覺候故、成人の後、自然と仕置行届申候、大名の自身にたふみ候事は、弓馬第一、鎧長刀劍術も心得可申候事、水心もふくてはあらぬ事に候、

一學文は、大名自身博學に成に及ばぬ事にて候、學才有之者に常に其道の講釋を承り、其外物へ義理、善惡の事、行儀能き人の行ひ、名將忠臣の操、又は佐臣の心をくまし、

其國を亂し、代々の國郡を失はひ候事共、常々教り置、我身の曲に申るまぬ様に心か申候事、第一にて候、

一免角人之道は、五常を守るに止り、其外には我身の鏡なくしては、何事も知れぬものに候、常々鏡と違ひ、外より研事はあて、我心を心に研立申候事、我身の行ひのあしきは鏡

のてらさぬ故にて候儘、其くもらぬ様に致候事は、常々身の行の善惡を、人に尋るより外は無之候、惡を聞事を悦び、其座にて其惡を改め、善をつくり候者へはう美を遣し、

仕候得は、次第に鏡はてらし、身の善惡は其席にて知れ、家中の善惡は百姓の取沙汰、居たかゝ知れる事にて候、身の善を聞事を好み候得は、佐臣も氣に叶ひ候事計り言ふ様

に成り、惡を聞事を悦へば、忠臣は日々にすゝみ、忠言を時々聞事は身の行ひにて、天地の道に成候事にて候、此處またる者の第一の儀に候、召仕は利口に氣て人者の取入

處にて候、何事も正直成るものをえらみて召仕候事第一の事に候、一井伊兵部事、平日言葉少く、何事も人に云せ承り居り、氣たもく見え候得共、何事にて

もつ簡明し候得は、直に申者にて、取あけ我等へ、何ぞ了簡意ひお評議違ひお爲にならぬ事は、皆人のいはぬ所にて、物しづかに善惡を申者にて候、夫故後には何事も先内談

に致候様に成申候、一身のたしおみの事、人々好きうて、得手不得有之にて候、免角物にかたよらぬやうに

致させ候事、たとへば四季の花のいろ／＼さま／＼に咲候て、何れも詠め有之候、毒た

みと申草花も香ひ惡敷物にて、何の用にも立ぬ草の様に思へ共、湯の薬にて、煎して用

ひ候得は藝に候、其如く何藝も人の覺候事は承り置、何ぞの時用に立事有ものにて候、第一自身に不得事とは、人の致すも忌み候者、有之候事に候、夫は大名へ別して致しぬ事にて候、我等中事項までは、基を一向に不存、人へうつさ、不用の物氣詰にて用にも立ぬ事と計り存じ、人の好き候をば、うつ氣者の様に存候處、近年基を覽候得は、雨ふり、徒然にならざるにあり、失事而うつ氣者と存候者を相手に致し候、是にて察し候に、何事も詮ふ事事は、古より致置ぬ事にて、又々も自分氣に入しものを善と存じ、氣に入ぬ者を惡しと存せぬ様に致す事、事一人事とな候、只身の智慧の屈ぬ事と、朝夕に存る事にて候、

一幼少の者、得て氣に入ぬ事を申聞せ候時は、側に有ぬふ器物など投はうり物を損ひさせ候事、虫氣もふとはかり心得捨置候事、甚親の毒を増と申すに候、失唯虫氣に候は、灸治薬を用て、つらめやうに可致候、成人の後も何そ氣に入ぬ事有之候得は、物をそとふひ候事、有之候、是全く我儘のつり候改め事にて候、器物などは損ひ候ても、其通り人事に候得共、後には召仕者氣に入ぬ事申候とて、午うちに致し、氣めさえくと致たる様に成行事にて候、病氣根入深くあらぬ先に早く直す事にて候、

一堪忍の事、身を守る第一に候、何事へ藝術も堪忍なくては致し、覺候事もあらぬものにて候、天道に叶はぬ身の我まゝを致し候堪忍、天地の理に叶ふて先祖より一郡一城も失はぬ堪忍、人和を得るしも我氣隨を出す堪忍、其外身體ごとく堪忍を用る事に候、仁は我儘に召仕者、並民百姓へ賞罰を行はす、疎きを惠み近きも罰す、是仁へ堪忍也、君に仕て身命をかりし、一度の約束違ふは、是義へ堪忍也、人の事を先にして身づ事を後にし、越るより寝るまで行儀を正しくする、是禮へ堪忍也、我に慢して人をないかしるにする事をせず、是智へ堪忍也、君父に仕へしより初め、假初にも表裏輕薄をなす、古法を以て我智に隨はす、美器美服美色に心を動さす、是目の堪忍也、美香を好まむ、穢らはしき匂ひでもをかされず、是鼻の堪忍也、電士たは戰場にて、鐵炮の音に恐れず、矢陣にすゝみ高名をとくる、是耳の堪忍也、酒を過さず、美味を好ます、是口の堪忍也、其外手足にも堪忍ある也、右堪忍を一生の間全く守る人は、大身は家を起し國を治め、小身は身とを起し家を治む、堪忍加ふる事は十全に至るねは、家をも國をも起す事あらぬもの也、たとへば十の内に八つ守り、一ツ二ツ破り候得は、其破れし所にて、夫まで堪忍はいたつらに成行物にて候、大才へ堪忍強き者の、是近

こゝろ、最輝や堪忍あらぬ申事、申候共、夫も義に依て破るといふも、行はるるまづにて候へば、多くは我知恵の短きより、我儘に落入て、身を果し家を破り、國郡を失ふ、たとへば弓と射るもの、牛前もよく引渡したるに、由るみ持出し、ふとして初め能き牛前もいたづらに成る様なるものに候。兎角堪忍は十全あらねば、堪忍のせんなき事にて候。日本にては、堪忍十全もの、橋正成一人にて候。又初より一向堪忍の氣ふしと、言葉にも出し行ては、近世の武田勝頼にて候。夫故一生の行て道に叶はず、先祖より數代の家を失ひ身を果し候。織田信長は近世の大將にて、人をも能く使ひ、大氣にて智勇勝れし人に候へとも、堪忍セツハツにて破れ候。夫も事も發り候。又大關は古今の大氣、智勇至而堪忍強かりし者、車賤より二十年のうちに天下の主ともなれし程の事に候へども、餘り大氣を介限う堪忍破れ候。大氣は能き事はなく候得共、夫も身の月どをしらず、萬事花塵にすぎ、^過分に知行其外人に施すは大氣にてはなく、奢と申ものにて候。知行其外施するも介限に當ること能く候。奢心なく、物事儉約を用ひ、常に其程を能く知るを以て、政道正しきといふ、なれとも下々は過分に知行其外給物其程に施したるをば、奢るものに引當り、人よくと取沙汰致し候。古

候

しより賢臣賢主の過分に給物其程花塵の行ひはよく、身を損ひし儉約を用ひしことに候。一總して匹は候も、何ぞは落か不調^清にて叱り候こと、其者人能納得致し、向後改させ候様に致事。主人たる者の專一に候。我等年若より此趣を専ら心懸候。兎角、是れも誤りを改めものはよく候。兎角、いかに人よすたる様には、致度事に候。失あやまち候もの、其誤り候事計り申て叱り候致し、心得盡ひ致し、主人をうらみ申候様に成行。夫まで能勤候ものも不足の心出來不勤に成て、主人もそれか、成候事、全く異見の致方よし、人をも捨ると申も、にて候。異見の致方は、其者を呼出し、一人側に取成し候者を遣、外の者を止め、常よりも言葉を知らず、前方に其方はかよふの節、何の事かを致し、何の節能勤候杯と、其もの、心を悦ばしめ、其後かよふの不調法、其方には似合ぬ事と、よく申聞せられし、此以後相改め、前々の通り心付け勤候様にと申聞候へば、理に服し身の誤りを存付、相改め候ものにて候。主人たるもの一人にても、能人の出來、いかやうの輕き者にては、科人の出來ぬ事のみを心懸け、身を損み候事、要にて候。いかよふの利發の者も、主人の目よりは行届ぬものにて候。増て並の

者決してぬけかちの事にてあるべく候、其行届めぬ所は、主人より行届き候様に心附、不調法にならぬ様に致し、召仕ふ事心懸第一の事に候、召仕候者科に申付るもの多きは、主人の科に候、

一主人の風儀は、側廻りに召仕ふもの、風俗大切に候、上の事下へ知れぬ様に下の事は能く下へされるように有度事に候、取分け氣に入候者、風俗心懸け肝要なる事にて、其物一人にて、一家中の風俗變じ、善惡有る事に候、

一治世にも身を樂に持候事、保養にも惡敷事にて、業のなき時は、婦色の外色々の惡敷事出来候ま、朝起るより臥まで行儀を定め、日々に其通りに致候事、食事も常々美味計り給てはむまき物にあらず、平日の食物は随分輕き味の者宜く候、月に兩三度は美味給候て能きよ承り及候、

一近年日課を六萬べんつ、唱へし事、夫人の人のめ過役にて候、遍敷へし候様皆々申聞候、成程へん數をへし候は、樂に成候へども、幼少より戰國に生れ、多くの人を殺し候へは、せめては罪はろけにも成り申べく候半、且若年より一日も隙に暮し候事はな

き身申へ、當世は静由る隙過てしまり申候、何ぞの業を致し度候へども、夫も入らぬ事

我々と成りくれ家の花

由へ念佛を日々の稽古事の代りに致し候様に、朝起いたし夜も早く休み申さず、怠

らぬ様に心懸候事、夫故食餌の當りもなく、健にて念佛の影と存候、右へ申傳へ候、先其人の行儀を正さんと思はし、平日へ起臥の制限と、食事と日々同じ事、又多分是にて行儀の正しき正しからざるは知れ申候よし、左様に可有之事に候、総して氣文過てけあ

やうき事に候、勇氣は分てなくてはあらぬ第一の事に候得共、只和らかに大いふに有度事に候、側に召仕ふもの、おさつに無之様可申付候、

右之趣能御申聞かせ、只直に父母兄弟中禮儀作法亂れぬ様に、是々も御育て可被成候、右之文は國へ渡し置、成人の後も能々相心得候様に御をし、可被成候かし、

二月廿五日

かへす、ぬれしも、國事随分御心付可被成候、右之通にさへ御育て被成候へは、寧事申事無之候以上、

右之一冊は神君駿河國に被爲入候頃、江戸へ御成有之御還之後、秀忠公之御臺所へ被進候

御文の寫也

御文の寫也
二月廿五日
治廣公御次女福島
御出府之節被進之

桃の嫩葉

貞姫君

上杉治憲

文化五年

治廣公御次女福島
御出府之節被進之

御出府之節被進之

天の道にたける、陽は貴く陰は賤し、人の道にたける、男は貴く女は賤し、貴きものは上
に位し、賤しきものは下に位す、陽の徳は動いて剛健、陰の徳は靜にして柔順、是古今不
易の大道なり、されば曹大家の女誡にも、卑弱をして第一とせり、右は女生れれば是を牀
下臥さしめ、互博を弄せしむといへり、牀下に臥さしむるは、則ち卑弱なるべきを明ら
かにして、人の下る事を教へ示すなり、又互博は紡績の具なるが故に、その勞に習ひて勤を
執るべきを教へ示すなり、其卑弱とは、謙讓といへり、くだりかぶり、恭敬といへり、みうや
まひて、人を失にし己を後にして、善あれどもみかからず、はさず、惡あれども自辭せず
恥を忍び、垢を含んで、常に恐れたざるを、卑弱にして人の下るとはいふなり、勤を取
るといふは、晩きに寝ね、早きに起きて、所作に劇務を辭せず、必ず成熟し、事業よく整

ひ理むるを、勤を執るといふなり、それ女子は我家を出で、夫主の家を家とし、我、父母を離れて、夫主の父母を父母とするにて、孝、貞の二、婦道の第一なり、孝とは舅姑に事へて敬愛を盡し、貞とは夫主に事へて節操を正しくするをいふ、女はもと人に従ふものなり、従とは此身を人に任する事にて、己を有りとするの心なきをいふ、若し己にても己を有りとするの心あれば、舅姑夫主の心にも通ひて、萬の禍是より生ず、故に父母在す時は、敢て其身を有りとせず、敢て其財を私せずといふ、是、卑は尊に統ぶるもの故、子婦たるは、道は、何一つ我物とせずして、皆父母舅姑の物とし、聊、事にて、父母舅姑の命に違はず、息らふして、致々としてつとむべきなり、婦は影の随ひ、如しとぞ、形に影の随ひ、聲に響の應ずるは、間に髪をいれず、聊、違はぬものなり、そのごとく少しも舅姑の心に違ふ、ぬをたとして、いへる詞なり、夫孝子親愛の心あれば、必、和氣あり、和氣あれば、必、愉色あり、愉色あれば、必、婉容あり、和はやはらぐと訓じて、あうき氣なきをいふ、舅姑をいとをしく大切にたもふ心深ければ、自然と相對したる上か、氣和して違ひもとることなきものなり、そ、和氣がやはらげば、自、顔色もにこはやし、顔色かにこはよしすれば、たのづから此身の立居振舞もいとやかにして、能く物にしたがひて違ふことなきものなり、されどこれら

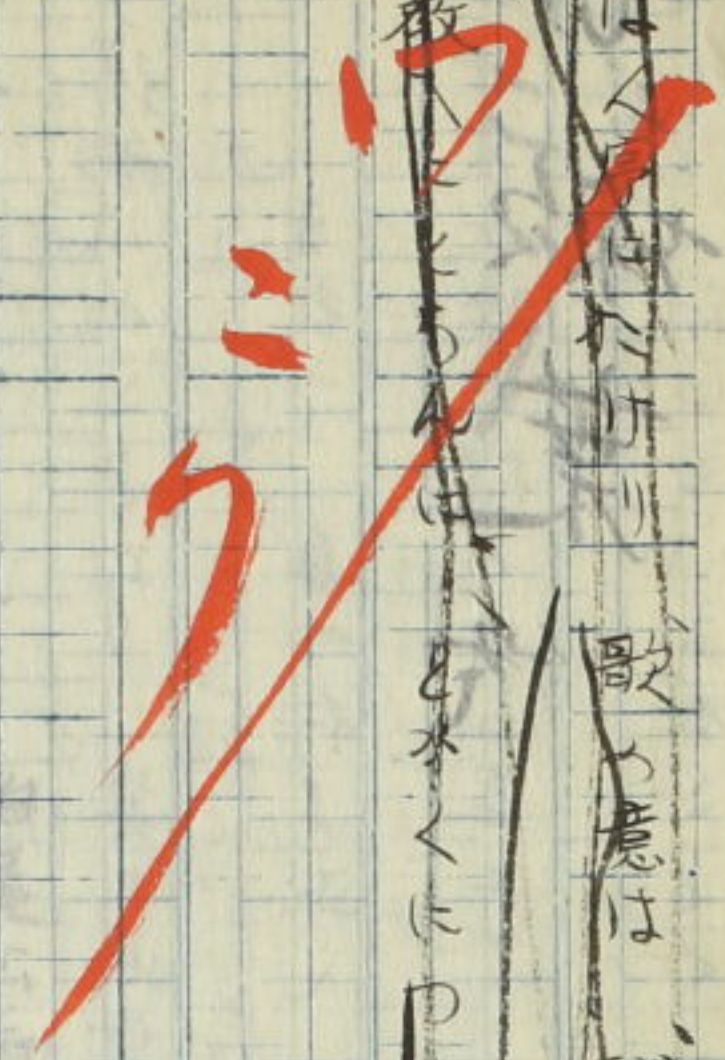
の事、其、眞實より出づるに非ざれば、こしらへものにて、一朝一夕其の如くさといへど、我に誠なければ、終には其偽りも顯はれて、舅姑にも見かざらるゝ、そかし、是を身に反して、誠あらざれば、親に順ならざるといへり、唯其眞實の誠たによれば、當時行届かぬ事ありとも、これも又いつかは其誠あらはれて、舅姑をも感ぜしむる也、聲なきに言ふ、形なきに視るといふ、誠よりするに非ずば、何ぞ得ん、前にも云ひたる如く、本より女子は人に適する道ありて、終身我父母に事するもにあらざれば、人情にて我父母をのみ慕はしくしたるひ、生れしより見習ひたれば、我家の事のみよき事と心得るか、舅姑の事へかたも疎になり、家事も我家の風にのみなしたくなるより、舅姑の心にも違ふなり、すでに其家に嫁するうへは、何事も舅姑の命を承りて、其家風に随ひべきなり、斯くいへば女子は我父母の孝を盡す事はあらぬやうなれども、左にはあらず、他門に嫁して舅姑へよく事へ、夫婦の間もむつまじく、子孫繁榮するを見れば、我父母の心にてはいかばかり嬉しく安んべし、孝は父母の心を悦ばしむ安んせしむるほどの事やある、我父母の嬉しく安んじ玉ふ様に、舅姑夫主の事する事、是則我父母の孝を盡すにて、父母舅姑へともに孝を爲すの道也、それ夫婦の間は人倫の大節なり、始めに云ひたるごとく、陰陽性異なれば、男女の行も亦

異なる也、故に男は強を以て貴とし、女は弱を以て美と云へり、然れば身を修むる事は、故にしくはなし、強きをさくるは順にしくはなし、夫婦の間は終身離れぬものにて、
妻室の内に周旋する中、知らず、媒贖る、事を生じ、媒贖るれば言語の間にも過る事あり、言語の間には過れば、縦恣必作る、縦恣作れば夫を侮る心生じ、侮る心生れば曲直を争ひ、訟争起りて、それより忿怒の事生ず、是よりはいふべからざる禍出づるなり、夫婦の間は義和をもて親み、恩好をもて合するものなるに、忿怒争訟何の恩義かある、恩義ともに廢する時は、夫婦の道は、なる、なり、夫は妻の天あり、天には誠に道るべからず、夫には誠に離るべからず、夫主によく思はる、是を永畢と云ひて、終身全くつれそなり、されば夫主の心は、求めねはならぬもの也、求とは佞媚にて苟もしたしむを云ふにみづ、我心を専一にして顔色を正し、身の取廻しも禮義にはづれず、
くまにき事を聞くことなく、視まにきを視る事なく、出づるときに正しからざる容色なく入るときに飾りを取亂さず、事心正色を以て夫主の心を求むべきなり、凡女に四行あり、四行とは、婦徳婦言容婦功なり、いさぎよく心ざわかしからず、正しくしつとりとして節操を守る事はつくりとし、己が行のうへに恥かしき事あるかと、常に心に忘れず、動靜

について法度ある、是を婦の徳と云ふ也、言語はよき辭を擇んで悪語の間うにくき事をいはず、言ふべきときに言ひて、
お誰か聞きてよいとはいはしからぬを婦の言といふ也、塵れたるを洗ひきよめ、身べとりかがりもあざやかにいさぎよく、湯水で髪あらひも其す、
時にたして、身に垢つき恥かしからぬ様に心懸くるを、婦の容と云ふなり、心を待つみ細くりに事にして、うつけたれたる事を好まず、酒食の事に潔く諫へ、
祭禮賓客に奉ずる、是を婦の功と云ふなり、是等の事なすべきはさみかたき事にもあらず、唯平生心に放れぬやうに心を用うれば、自然と其事々に臨みて出づるものなり、
それ女の他門の嫁し、夫主によくねもはる、も、舅姑の己を愛し玉ふにはじまる、舅姑の己を愛し玉ふは、其家の親族の譽むるより出づる也、されば其親族の心を失はざるやうに、したしみを結ぶべきものなり、一家よく和すれば諍も掩ひ、
外に離るれば悪も揚る必然の勢なり、其親族の和合を求むるは、謙順と何事も我身をりくたり、己を立てず物に順従するにあり、
されば古人も女を嫁するは吾家に勝るべく、婦を娶るは吾家にいかざるべしといへるも、皆其縁順にして驕傲なる言ひが爲也、
その既に舅姑に矜せられ、夫主に差せられ、己また聰哲の性有とも慎みて外事に預るべからず、
乳鶏の晨するは家の索なりと誡しめ、内言細を出

さす、非もなく儀もなく、唯酒食これ講るといふ教おれ、女は唯内治のみに心を用うべきものなり、夫、關雎の篇は、詩經三百篇の第一義にして、文王の后大姒といはるは、幽閑貞靜の徳ましく、露程も妬忌の行なく、能く衆妾を和好ましく、猶も賢女を求め得て、共に文王に事し、もはん事のみ、寤寐に求む玉ふといへり、されば、こゝの翁斯の榮、子孫衆多にたはしむせしむかし、女のみ此上や有るべき、女はこゝろ狭きものにて、妬忌の情あり、ねたみいむ心より身をもほろぼし、後世までも悪しき名を傳へ、人の笑となりたること少なからず、慎むべく恐るべきは、妬忌の心なり、夫主を思ふの眞實なるときは、わづから妬忌の心生ぜず、我に勝れるをえらびて共に夫主に事へんと、たもふ心深かるべき、右近が忘るゝの歌、井筒の女の風吹はなど、いとほしくぞねば申れ、夫婦は人倫の始にて、婦は家の盛衰のよる所、家國の治亂も是より出づるなり、舅姑に孝敬し、夫主に貞順して、其重家、瑟琴のごとく和調するときは、榮を耀きて、人々も稱譽すれば、延いて我父母兄弟の名をも顯はす、是程の孝順あらんや、それは唯日夜身を慎み修め、畏をいだくにあり、戦々競々として深き淵に臨み、いとく、薄き氷を踏むいとくとは、常に危を忘れぬを云ふ教誡なり、勉めよや、慎めよや。

人といはるは、けしきなり、歌の意は、賢き心をわれは思はぬものをいふ下句詩也、これを教へたるは、と水くにつけて、賢き心より、目の前へ欲はほだされて、後を計



ことし文に五の夏、我家の孫女嫁するに臨みて、常に心に留め置くべき事書き記してよと求むるにぞ、予が聞く事のすくふき、其益あらんほどの事もあらねど、切にもとむる志を感じ、稻舟のいなむべきにもあらねば、曹大家の女誡などにもとづき、そのあらましを解し易からんやうに和語にあらはし、其他古人の云ひ置きたる事どもとり集めて、此行のはちむけとなし侍る。

桃の嫩葉

老かこころ

上杉治憲

文化六年 三姫君 御出府之節被進之

今度出府し給ふによりて、永く心抱にもふりなん事書き記してあたしよと求め、交わらぬ志を感じ入りぬ、天性美質にたはする上、幼より書籍も讀み習はれ、婦道婦徳の事も粗聞う及ばれしなれば、今更拙き筆を聚めて事々敷云ひふさくもをこがましけれど、斯く請はるゝのしはうしく、又且御身に望む心のなきにしもあらねば、唯その有りさまを、文章をもをさめず、淺近の事どもを書き記し侍るのみ、

夫人は三に成るとして、父母是を生み、師是を教へ、君是を養ふにて、いづれも深き恩義ある中に、深く責きは是父母の恩なり、父母の恩と云ふは、山よりも高く海よりも深き事なれば、此の徳に報いん事は、逆も及ぶべきにはあらねど、責めては其驚分の一をも、心も及ぶだけ力といくだけ書を盡し勤むるを、孝とはいふなり、此身の天地の間に生れ出て

たる根本の父母に事ふる道なれば、百行の基萬善の先とも云ひて、人の身は、孝をこ
そ第一とはするべし。夫は他門の嫁し、他の人を父母とし、他の人を夫とし、他の親戚
を親戚とするべし。和漢古今、失つは婦女の通例なる也。我身を行正しく、我心を誠だに
あらば、いつくひかある所へ嫁し行くと、舅姑の慈愛を得、夫の歡心を獲得、親戚に和
合するには有るべけれど、他門の事なれば、其家婦も熟知せず、見ず知らずの人を舅姑夫
親戚となせる事なれば、是に事して其心に適はん事、容易に心を用ひては、事へ得べく處
し得べきことにはあらず。然るに御身の事はいかなる果報にや、我家に居て我父母に
つかへ、終身膝下を去らず、外ならぬ式部殿に配し、我親戚を親戚とし、諸代徳恩の人に
いつきかしづかれ給ふは、上もなす幸福にて、何ん心か勞し、何ん身か苦しまるべき哉、
然らばなく程の幸福を得られしうへは、又それ程の孝順貞節も盡し給はねば、この幸福を
永く保ち得給はぬことなり。其れ此幸福を保ち得給はん事は、常に此幸福を得られしこと
を恐れつゝ、しまれて、身を行を正し、朝夕に致しとしてつとめ給ふにあり。其孝順貞
節と云ふ仕方々條も様々ある事にて、聖賢の教より先哲の格言、追々見習ひ聞き習はれた
るごとくにて、初にもいふがごとく、拙き筆に著すべきにも及ばぬ事なり。その聖賢の教

戒、先哲の格言といへども、目に見、耳に聞きたるのみにて、是を心にとめず、身に修
し行はざれば、用には立たざる也。身に修し行ふといふとも、今視今聽きて其儘行ひえら
るゝものにあらず、日を積み年を重ねて、朝夕に心を放たず、修行するにたくては、我
ものにほし得ぬことなり。我物にふし得ぬときは、物真似といふになりて、感通せざるふ
り、其仕方々條種々有りと云へども、つまり此身天地の間に生れしことは、父母の洪恩
にて、此身は父母の遺體なる事を常に忘れず、眞實より父母をいとはしく大切にする心
を重し、偽りなきが其根本にて、要に誠みれば中ずといへども、遠からず、事あるに不
いて少いの手遣間道有といふとも、届ぬといふ事はなき也。此事は我身不才不徳にて行
き届れぬ及はれぬ事と譲るべき事にあらず、志を立て、心へ及ぶだけ、力の届くだけ、
十分を勉めて、慙なくして止むべきなり。既に心の及ぶだけ力の届くだけ、盡しつゝ
とむれば、いつか徳もすゝみ、知も達することぞかし、つくづくされよ。
男女の別は人倫の大節にして、男は外に位れて外事を治め、女は内に位して内事を治める
事也。治國平天下といへば、大總なる事の端にたもはるれども、天下の本は國、國の本は
家なり。家齊ふと云ふも、一家の内男女正しき其本あり。其本亂れて末治まることは

なき事也、今歳の今迄、周の代の治平を唱ふるも、文王太姒美德を以て、寡妻に刊し、兄弟に至り、家邦を御すと有りて、其始、太姒の先づ能く文王の御徳に順従し給ひ、文王も又能く太姒の御輔を得給ひて、御夫婦岐周の地に徳を積み給ひ、より、其教化終に天下に推及したる事なり、今一通りに考ふれば、婦人の上は政治の事には預らざる様にたもはるれども、政事の中は一家閨門の問より起る事にて、其身を治め徳を慎まれ、夫は妻の天あり、天には違ふべからずと云ふことを、常に心に存して、恭敬を忘れず、閨門の内能く和偕し、式部殿の徳に順従し給ふ事、則ちがて式部殿の政治を輔け申さるゝや、稚き心にては、程遠き真向に徳を修むればとて、其代の一國に及ぶべきやと思はるべけれど、感通の理は妙なるものにて、冥々に修むれば、必ず昭るに其効著るゝこと疑ひなきなり、鶴九皋に鳴て聲天に聞あること詩經にも云ひ置きたれ、其徳正しく真向よく和偕せば、一國賢夫人とこそ仰くべけれ、既に賢夫人と仰ぐ日に、など其代の方ばさること有るべき、近頃は櫻田貞純姫君の彈正殿への事へられれた、百里を隔てし我等への孝養深からぬを、人々感賞する事兼ねて見聞かるゝ通也、よく此徳に習はれよ、茲をたもぶものにあり、誠みある處ふしか掩はん、勉めつとめおれよ、

姁斯の繁榮頓て出生有りなん、其出生の兒は、後我の民に君として、四民の倚頼する處なり、賢ならば、父祖の業を繼がれて、國益盛に、四民其澤に浴したん、もしそれ不賢ならば、父祖の業を墮し、國も又衰へ、四民其所を失ふべし、恐れざるべけんや、古は胎教として胎内よりして其教あり、まして出生のうへは幼稚の物辨へなき中より、教育は大事なることなれば、次賢如女にたもはれども、其教育の仕方ば、是も又古人の教詳におれば、其人に問ひ求られよ、太宰先生子を教ふるは母を教ふるに如くと常に申されしは、格言とこそたもはるれ、人情子はいとばしくかはきもみにて、まして母のうへは慈愛の心深きもの故、往々愛にながれやすきぞ、孟子を始として、世々の賢人君子といはるゝ、其人の母は、必ず賢母なり、賢母の其子を養つるは、能く其愛にながれざるあり、愛に流れざるが、實に其子を愛するにて、愛にながるゝは、實に其子を愛せぬなり、夫をいかにといふに、母として其子の才徳有らん事を願はざるものありねど、眼前の愛に忍ばて目長にし、其教へかたの行届かて驕傲の性を驕し成し、不徳不人に至らする、是を能く其子を愛すといふべきや、可愛子に旅をさせよといへる諺は、愛を殺げといへる教なり、然らば慈愛は不深なるべき事ながら、其慈愛にながれ給はて、其事以て育てかたに心を用ゐられ、附々め

者どもをもよくさとされよ、
此表向の事、彈正殿教示あり、則能く其教に従ひ質素を守られし事、當世に類ひ稀なる事
と、常々感入りに教どもなり、但此表の事は、邊鄙の田舎にて誠に手快き事なり、是
より大都會の繁富花麗の有様を見聞かれなば、何ほどか驚かれん、其始は驚かるべきな
れど、羊に至らば、其花麗に心も移りうらやむ心生ずるものあり、其美む心生じ後は、
いつか其花麗を花麗ともたもはざる事人情にて、本の質素なる風儀はいつか忘れはつるな
り、忘れはつるのみかその質素がいやうしく成りて、是より奢侈風流にも移り行くものな
り、此所の質素日の始によく居られねば、既に我心一たび動き後は、中々半途にして
立歸ることは能はざるあり、お當家の事は、家柄と云ひ、家格と云ひ、當時の大諸侯いつ
れにか恥ぢあるべき、然れども往々小様になり、殊更寛文のころ、不申にして領地の羊を
裁せられしなり、領地の羊裁せらるゝといへども、家臣は皆以て其以前にかならず扶助し
給ふ事、誠に先君の厚德おしと云ふも愚なる事也、楚國は以て寶とせざとかや、府庫に幾
ばくの名器珍寶有りとも、何ぞ此家臣の濟たる寶にまさる寶や有るべき、去れども領地
に過ぎたる家臣扶助あると、家格重くして大諸侯に列すにて、取用も多し、四民の撫

育もたもふ儘にならざる事、追々聞き及ばれし如く也、依ては彈正殿も式部殿も、斯まで
節儉を用みられ、身廻りの艱難不自由をもいとひなく、只々四民撫育の事のみ心を盡し申
する、いと、是も又朝夕見聞かるゝ如くなり、故に大邦の花麗繁富の有様には似ても似ぬ
事どもなり、年若くして、女子の心からば、時折から衣服など、嘸かゝ氣の毒にもたも
はれなん、是も又止むことなき人情ながら、是に少しも心動きて、是までの質素の風儀を
失はん事、終有る事すくなし、戒を畏れたもはるべきなり、然らばいづく迄も、是迄の風
儀質素を取守られ、養女功の事に心を盡し、常に和書歌書などして心を養はれよ、博
覧を貪り歌人にならんとにも及ぶべからず、凡學問はもと此身を修むる道を知らんためな
れは、和書假名がき物にても、女の教誡を書き記せしもの數多あり、是等の内より今月
上、推當て、善を修し惡を誡められよ、和歌を玩へば、物よあはれを知るとも深く、
月花に對しても感興深く、自然と心ばへ趣劣ならで、大に情性を養ふ助と成りなん、前に
いふごとく御身は誠に稀なる幸福を得られし事なれば、此幸福を常に慎み、いつく迄も質
素を守られよ、愷悌の君子民之父母といへば、やかて式部殿は此國民の父なり、御身は此
國民の母ならずや、式部殿は四民を子とし教へられ、御身は四民を子とし愛せられなば、

此四民も又た御身二方を父とし母とし戴きなん、かゝるたのめは又外に有るべきや、されは其子の爲にする今日より不自由艱難は物かはなるべし、

御代々の奥向は、皆他より入興有りて、世の習俗皆其家風を其儘に移さるゝなれば、其風儀格式もまた區々なり、御身の事は、此國に生れて則此國の君夫人に立たるれば、此家の

質素の家風失はれまじきなり、もし此家の風に違はれては、本意もあらざるべし、諄々と御両親へ孝養を盡され、御両親の心を安んじ、式部殿へ順從し給ひ、幽閑貞靜の徳をうみ

夫婦睦敷、蠡斯の繁榮かぎりなく、我國の賢夫人と仰がれ給ひかしと、首途に及んで千秋を祝し、且婦徳を望む、祖父の心中くみはかれよ、他へこそ行かれね、今より後いつ相

見るべき期も知らざれば、嗚呼惜しくこそたもひ侍れ、武藏の江戸なる館にたもむき給ふはなむけに、
はる憲

春を得て、花すくも、重ぬとも、あかふるさとの、寒さあするな、

老のころ 終

千とせぬ基

上杉 治憲

文化十年 演姫君 治廣公御三女、因 御女府之節被進之

今度御存じ玉ふに就て、心おにも成りふんこと書記してと求めらるゝ事、年若の心付感

も入りしなり、先に三夫人へ書き贈りし老心、貞姫へ示しぬる桃の嫩葉に相書き記せ

え、二巻もかき寫し所持せ玉へば、外に申し進ずべき心づきもあらす、夫の心みなうす

近頃、夫の浪寄々来るまゝに、記憶せし事共もふつゝかになりきめれば、用立たん

程の事は有すけれど、二方へも申進し、今たかくもとやらるゝに深く辭しなんも本

意ならず、みな是を人の云ひ置けしとて、聞きとし玉ふ事ながら、あらう左

に記し侍る、
後、の匡衡といひし人の言葉にも、妃匹の際には民のほしめ、萬福のみなもと、婚姻の禮正しく、まゐりて後、品物とけて天命全し、孔子詩を論じ玉ひしも、開帷を以て始しし玉ふは

人君は民の父母、后夫人の行天地に倣し、けられれば、神靈の統を奉じて萬物の宜を理る事なし。故に詩にも、初難たる淑女は君子の好求と有りて、能く其正淑を致して其操を二にせしか。情欲の惑容儀に介する、ことなく、寡黙の意動靜に移らば、未だして後身尊に配して宗廟の至となるべし。是綱紀の始め王教の端なり。上世より以來三代興廢、いまだ爰にふむるはあやかし、けり。されば夏禹王といへる聖天子は、塗山といへるに賢妃を娶られ、夏啓を生み玉ひ。天下是に歸して、子孫國を享けらる、事四百年、殷の湯王といへる聖天子は、有莘氏といへる賢妃を娶られ、子孫天下をたもたる、事六百年、周の御先祖は、世々賢妃よし、けり。大王といへるは大華といへる賢妃を娶られ、王季又大任といへる賢妃を娶られて、文王といへる聖天子生れ玉ひ。文王又大妣といへる賢妃を娶られ、子孫天下を保たる、事八百年、是皆聖天子に賢妃配せられしより、斯福祿も長久なる也。其末世に及びて、嬖女出しかば、夏は末喜を以て亡び、周は褒姒を以て亡びし、けり。今それ后夫人の上は男子と違ひ、徳義の修行迄には及ばぬことの様にたもはかれど、后夫人の賢不賢徳不徳にて、天下國家の治亂興廢に預る事、上にいひし如くなれば、たそれつゝ、しまれて女徳の修行懈怠致されば、世に有るところの女訓を誡みふみども、常に誡は

れ讀み覺え給ふべき事ぞかし。男子の徳は乾剛を尊び、女子の徳は坤順を尊ぶ。それ故女子は三従といへる教有りて、物に順從するを女子の徳義とす。是が爲に驕傲をいましめ、卑弱を専らとする事にて、詩經に、女子生るれば、是を地に寐ねしめ、是に傳を弄せしむといふも、有生のはしめより卑弱を示す教なりとぞ。卑弱とは身を謙り心のはげしからずなり。やが成る事ぞかし。順從ならざれば舅姑の心にも叶はず、親戚にも睦しからぬ也。唐の太宗の南平公主と申せし姫宮は、王桂といへるもの、子敬直といひし人に嫁し玉ひしに、舅姑に事して婦道をつくし、身は是天子の姫宮なれど、堂下に拜し膝を捧げて事へ給ひしを、父帝聞し召して悦び玉ひしとなん、是皆卑弱の道を守り給ひしが故なり。貴き身柄もて賤に下り嫁し玉ふすらもくゝ如し、又や同等の上にたいてをや。古歌に、人心、ひき、に下たる、水ならは、身はやす川の、名にや流れん、内則に女の徳に嫁婉聽従と説けるも、こと葉こまやみに容儀にとやかにして、人の言葉を能く聞き入れ物に従ひてさからはぬことぞ、是皆卑弱の義にて、曹大家の女誡にも專らに此事を云へり。舅姑を養ひ、夫主に事へ、宮中の事うみにて、鬪の外をたもんはからず

非もなく儀もなく、可もなく不可もなくを、婦の徳とは云ふ事にて、たゞ何事も一りく
たりなば、家人もいつとなく和き事やすうかにひすかしめられ、是いみじし行作なりや
今時の人さかしと譽めぬる女にも、誠の道に叶へる人は稀なり、漢の蔡文姬は蔡琰は
詩を作り書を能くせし女ども、節義を失ひし事なりよし、程子も時人の婦人の文玉童を作
り人にもてはやさるゝをば深く非なりとせしとむ
詩經に大似の徳を窃れたる淑女といひ、窃は幽闇の意と注して、いと深く静にして
くあらはならず、物さばかりめをいふとわや、淑は善なりと注し、その内に女の徳の
正しく事一にまことなるもふくめりとしきく、温良とて物もつかしからうらゝかなるを女
の徳の要とはするなり、昔衛の莊姜と申せしは、夫君莊公に得られ給はれども、背き離
るゝ心はたはさず、諸の嬖妾と下へ禮をうしなひ犯し侍るも、更に我にある則を遠へじと
みし給ひしよし、仰き習はるべき事ならずや、夫人の徳は、よろづに憐みふかう有りた
きものにぞ
高倉院幼主にたはせし御時より、柔和にたはしませしか、其に紅葉を愛させ給ひ、此の陣
に小山を築きて萩楓色うつくしを植させ、ひともす散覽よりける、或は風はげしく吹い

て、散れるもみじ葉錦を敷けるかことし、殿宇の春朝清めずとて、残れる枝散れる木の葉
をかき集め、朝の風寒かりければ、酒暖めて給ける薪にこそはしたりけれ、奉行の藏人
いかなる逆鱗にかゝらんといふかりけるに、君きこし召され、殊に御心よげに打突はせ給
ひ、林間に酒を暖めて紅葉を焼くと云ふ詩の心は、誰か教へけるぞや、やさしうもしたる
ものかなし、いと興せさせ玉ひけるとなん、婦人は殊更かゝる情ふかき事こそあらまほし
きことなれ
女は聞見せばもつにて、愚にして身うほどをしらぬ故、人を非とし己を是とたもふ事多
し、己を是と思ふ心はせ、大に萬事ハ筋をまやまり、卑弱の道をそこなふもなり、人を
あしとし身をよしと頼むは、もとより僻事なり、人を敬ひても其人猶禮の貌をとらざるは
我が敬み至らぬと顧み、人をいつくしみても其人のなれ親しみ心を報いざるは、我い
つくしみ未しきをかへりみよ、かく己に返し弄ね侍らは、外を咎むるいとまなからん
賢き人の文にも、己を責むるものば、天下の人非ならぬ理を知とあり、人を咎めざるは學
の進む所なりともいへり、古歌に
白浪もよせくるかたに、かへるなり、ひとを難波の、あしとたもふな

といへり、心を用ゐられよ、
婚禮に父母の嫁するを送りては戒め、敬みて夙夜舅姑の命に違はれといひしめ、母また
つとめつゝしみて夙夜家事に違ふ事なれとをしゝ、幼少より附き添ひし年高き女などか
かりの帯を結ひて、敬み敬ひて父母の事をしゝいひたまふ事をよく聞きて忘れ玉ふな
朝夕此帯を見給ひて、今言葉をたも^ひ出で鑑となし給へといふとぞ、嫁して後舅姑に孝
養をつくすこと、何ぞ我父母に異ならん、父母に孝ある女は、人に行きて舅姑に不孝なる
はなう也、孝なる嫁は舅姑もわきて慈愛するなり、其愛を頼みてさからひ怠らざれと、右
き教も侍るなり、兄孝と云ふは、朝夕侍食の事尤も専らに心をつくすべき事なから、猶心
を安んずるを孝の第一とはすることなり、兄や王侯の上は、侍養の人有りて夫々に能く言
ひ含めつゝ^めしむれば、さして舅姑の事欠もなきなり、若飲食すれば、香まじといへども
必^ず増て待ち、衣服を加ふれば、欲せずと云ふとも必服して待つといひ、事をかゝて人をし
て代らしめれば、己欲せずといへども姑く與へて是をせしめ、しかして後是を復すといひ
人より飲食衣服布帛など賜へば、受けて舅姑に獻じ、舅姑受くるときは、悦ぶとこ新に
賜を受るが如くし、もし返し玉ふときは辭し、命を得られば更に賜を受るが如くし、藏め

て之を待つといへる、則ち教も、皆是舅姑の心を安んずるを教へたる言葉ならずや、此舅姑
の心を安んずるの孝にふみく心を用ゐらるべき事をかし、
第一に言葉を慎み給ふべきなり、白圭の玷けたるは猶磨きつゞし、此言つけたるは藏む
べからずといへり、すべて物としにだに人の氣はひは知る、心へまかれる直きは言葉も
て顯る、既に言の葉に出てゝは、後に悔めども甲斐なき事なるべし、諺にも禍は口より出
て、病は口より入るとこそいひしむ、恐れ玉ふべきなり、古訓にも言葉すくな^きを女徳
とすれば、口重げなるは口さかしきより増れり、易といへる書にも、善人の言葉はすくな
く騒がしき人の辭は多しといへり、身の榮え辱めも皆言の招く所なれば、樞機の發は榮辱
の主ともあり、一言の失より萬事の破れも出で侍るなれば、あなかしこ言葉をは深くつゝ
しみたまはざらめや、
夫主に事へ玉ふは貞順へ二なり、貞とは正ふしていつまでもかはらぬことなり、されば女
は夫の過不遇に操のかはらぬを貞女といひ、松の霜雪に葉かゝぬを貞松といふ、婦の徳は
柔順なるを貞女といへども、又一つ勤かぬ貞烈の徳あるべきなり、地の徳は陰なれども
坤の卦には直方大といへり、直は正ふしてまがらず、方は稜角て轉はすべからぬなり、順

ははじめにもいへるごとく、あるやかにして己を正せず、陰は陽に従ふ道理を忘れず、夫主の指揮に従ふを云ふなり。夫婦の好みは終身離れず、居室の間に周旋するなれば、知らず。一、嫌隙ある事も出て易きものをかし、故に常に男女の別を正ふして、禮儀を亂さず、敬慎を専らとして、夫主の心を求むべきなり。夫主の心を求むといふて、佞媚にして苟もしたしむべき事にはあらず。夫主もし過有るに當りては、顔色を知らげ心を靜にして諫むべき事也。周の宣姜といへるは、賢にして徳ある后にましませし。中王早く臥し玉ひ、晏く起き玉ひしかば、姜后簪珥を脱し玉ひ、永巷に退きて、其傳を以て宣王に、妾不文にして、淫心あらはれ、君王をして禮を失はせまらせ、晏く朝して君王の色を樂し、み徳を忘玉ふを顯はせり。其源は妾なれば罪を請ふと宣ひしに、宣王寡人が過なり、后又罪にあらざると、夫より政事を勤め玉ひ、周室の中興とも仰かれ給ひしとかや。又唐の文德皇后は、大業の事、給ふ、宮中へ入過ありて帝の譴責あれば、后もひとしく怒り給ひ、帝の怒りあるみしとききみて、靜にひとまりを求む玉ひしかば、罪に陷る人なくて、人々后の情につき慕ひけるとぞ。或時朝より入らせ玉ひ、怒りみこみて、此田舍翁を殺すべしと宣ひしを、后誰ぞと問せ給ふ。太宗親徵が毎に朝庭下して我を辱しめしぞといふ。后退て衣服を整ひ

庭上に立て賀し給ふを、帝驚給ひ何故ぞと問はせ給ひしに、后妾を主明らふれば臣直しと、今親徵が直は君王の賢明にたはします事なり、何ぞ賀せざらんやと曰ひしかば、帝御心知らざしとかや。是を要に引けるは、夫主の心を求むるに、佞媚あるまじき爲め、夫主を補助し玉ひし、后妃の賢行を舉げ示すなり。聊したりぐりにかどめかすべきにあらず、只常に身を正うしてなれければ、やうに有べき事ぞかし。右歌に、
なかれては、いもせの山の、中に落るる、よし野の川、よしや世の中
是にて夫主へ事へ玉ふ、人道を悟り玉ふべきなり。忍といへる徳は萬事の基なり。堪忍と熟して物にたへしうふることなり。物をしらふる心なきより、人と争ひかち、思はぬ禍にも至ることぞかし。よし人しかけあしくともいきどほらず、いたう忍びて己が誠を盡しなは、むすはれし事も終には解けぬべし。日蔭長閑に風うらゝかならば、軒の垂氷も池の凍も解けざらめや。道なき人にも仇をむく心なければ、其人あるは、野あるは、愛慕して、事早になりぬと古人の教なり。長幼のたもひの調はさるは、上下の心の和がさるも、親族の中、つまじからぬも、皆人を責めて己が身をかりみざるが由なり。唐の張公藝が、九世の親類睦しかりしを、帝其道を問せ玉ひしに、公藝筆を取りて、忍の字百あり書きて

帝に奉りしは、よく誠みしゆならん、學がたき事なから、常に心にひめたもて玉ふべきなり

誠は人めたばねふり、貞女の二夫にまみえぬも、舅姑に愛敬を盡すも、皆誠の心より出づるに非ざれば物なし、誠とは褻上一にして聊ふたへならざる事なり、司馬溫公と云ひ、人

身を終るまでの修行、誠一字にありときく、誠は天地鬼神をも動かせり、次や舅姑夫主をや、母の子を愛するの誠より子が乳を好みて泣きぬるを母がりて泣くにやと撫でさすり

ぬれば、其撫で摩る心の誠より、はじめて乳を好みしも忘れて、其撫でささるゝの快よさには、いつか寐入るあり、是を誠はやらすといへども遠からずと云ふ、故と云ふも誠より

出づれば、氣のぬくる事なさゆへ、たもひもよらぬ過はなさふり、工に偽らんよりは拙ふく誠あれとこそ、古人も教へられし、

心だに、まことのみちに、かふひあは、いづるがとて、神やまもらむ、と云へる古歌、有り難くこそたもは申れ、

儉と吝とは間違ひやすきなり、儉は美德、吝は惡徳なり、儉とは物を小いめに用ふるを云ふ、心も小いめにせざれば放心に成り行き、身の調度も小いにならざれば奢に流る、書經に位

は期せざれども驕といふは、誰れも其始位高くなりなはたかぶらんとたもふ人もたけれど、位高くなりて此心小いにならざれば、いつしか驕慢に成り行き、富は期せざれども侈とは、

是も始め富みたらは侈らんとはたもはねども、富にまかせて飲食衣服より、都て身の調度、かじみならざれば、いつかは奢侈に流れ行くを戒め、詞なり、小いめといふは、物に節度

を立て足ることを知り、無用の費を省くをいふ、も、其意もつく施すべきに臨では、一毫をしむ心なく施し恵むべき事なり、其施し恵まんが爲に、兼ねて無用を省て有用を足すこ

となり、歌に、
たもせは、何いときか、あら小田に、近すも、也、やすからぬ身を、

みな人の、袖も妙なる、かゝるも、織る賤の女は、夜寒なるう、
是農夫功婢の勞をいためる和歌なり、此の心ありなば、身の衣食にふける心は有るまじ、

朝夕の飲食衣服より、よろづの調度に至るまで、儉素にして小いめに心かけ玉ふべきなり、吝は鄙者と熟して、いやしくしはき心ばせにて、物惜しみするを云ふ、賞すべく恵むべき

事有りても、吝者の心あれば、其意もつは賞すべき機にも後れて、恵み施すといへども人、心を失ふに至る、吝はせばき心故、すこし我に餘計有れば人にたかりうはもる、驕泰の

心起る、婦の第一の悪徳嫉妬の心も此の客より出来る事ばかり、妬める心はせばくきたなき志にて、己が心をもて心くるしめ侍るなり、妬の心よりは顔貌も物いふ聲もけはしく成りて、猶々夫主の愛想も盡きて、終には偕夫の契りも枯々に成り行くなり、夫は夫たらずとも妻は妻たる道を守り、腹あしきことなくなじやかなるべき事也、況や王侯の上は腰妾の人も多ければ、猶々少しも妬心有つては宮中治るるなり、前にも云へる大姫は、常に賢女を得て君にすゝめまゐらせ子孫の榮を希ひ玉へり、榊木の子は木高き樹木の枝垂れて下れるに、鶯鶯のけいまつはるを見て、よの心よく下りて下をいつくしみて妬まされ、下其情にすかつてなつき従ひ上下の心平になりて、福祿の幸あるに興じて、右の徳を譽めたる詞なり、凡妻を娶るは子孫の繁榮をたもふが事なり、されば婦たるもの他の家へ嫁しては、其家の子孫繁榮をこそたもふべき事なれ、まして王侯の家國へうへは、世間の事一大事なれば、我のみ子を生まんとに有らず、繼嗣の道へ廣からん事を願ひ思ひ玉ふべき事ばかり、壁の姫王の樊姫は君の爲に已に増れる女あれば、すゝめて心を助け、我愛の哀ふるをうれへおといへり、是に恥ぢて表向の大臣は、又皆已に勝れる賢者をすゝめしかば、内外よく整ひ、國家治りしとかや、よくし、心得玉ふべき事ぞかし、

御身は姉妹にも超て大國の君となり玉ふ事、いか成る果福にや、是天より受け得玉ふには有るべけれど、父母の大恩ならずや、此恩何の時に報え玉ふべき、此姉妹に超て玉ふ果福を得られしは事ひながらも、又恐れ玉ふべき事ならずや、いか成る果福も誓まされば盡ぬべし、奇とは其果福を果福とせず、恐れ慎みて心のまゝにせざるを誓といふ、身は鬼神は益を害して謙に福し、人道は益を悪んで謙を好むと云へり、満ちて覆らざるものありんや、故に益といへども益とせず、損して又損し、誓みて盡さねば、いつまでも此果福身に添ふて行末榮え玉ふぞかし、さき歌にあすを待つ、けふこそ花は、さかりなれ、咲き残らねば、ちうやばある、誰も見よ、みつればやかて、かく月の、いづよのそらや、人の世の中、といへり、依て益さぬいましめ常に心に存し玉ふべきことなむや、

柯を伐り柯を伐る、其則遠からずとかや、斧の柄を造らんとて斧をもて伐れば、其持ちし斧の柄こそ直にその規則といへる事にて、事を遠きにもとめず、近きに其則あることをいへる詩なり、御身へ則も遠く求め玉ふに及ばず、ちかく純夫人、三夫人のうへを見習はれよ、純夫人の中殿へ事へられかた、百里を隔て、愚老への孝養、三夫人への慈愛をうめ

かたなきは、兼て聞きも及ばれしごとくなり、また三夫人の純夫人屋形への事へかたも
いとあはらしく行き届れし事どもにて、人々感じよめるなり、百聞一見に如かずとかや、
き、し事より見し事は、心に染むもふかきものなり、老が言を待ず、出府の上此二方を師
として學ばれ、猶も純夫人の訓をよく受け用ゐられて、入興のうへ皇家和合琵琶を鼓す
るがごとく、秋の榮を希のみ、
かく書き綴り見れば、濱の真砂の数つもりて、筆の留め度も非ざれども、たもひ出づ
るまゝをかき著はし侍りのみ、本より他へ見せらるべきにも有らねば、辭も修めず、傍
に有り合ふふみどもよりあらし、かきとり侍れば、あとさきにとろふるも老の木莖と見
あるし給ふべし、今出府し玉ふ上は、又逢ふべき期もはかれず、たもひ出でられ、折
には、此文をひらき玉はりて、萬分の一益とも成りなば、老の幸何の歡かしらんやと、
文化十の壬辰夏月末の四日筆を染め侍るのみ、

こゝろを
ふみ
かき
著
は
し
侍
り
の
み
本
よ
り
他
へ
見
せ
ら
る
べ
き
に
も
有
ら
ね
ば
辭
も
修
め
ず
傍
に
有
り
合
ふ
ふ
み
ど
も
よ
り
あ
ら
し
か
き
と
り
侍
れ
ば
あ
と
さ
き
と
ろ
ふ
る
も
老
の
木
莖
と
見
あ
る
し
給
ふ
べ
し
今
出
府
し
玉
ふ
上
は
又
逢
ふ
べ
き
期
も
は
か
れ
ず
た
も
ひ
出
で
ら
れ
折
に
は
此
文
を
ひ
ら
き
玉
は
り
て
萬
分
の
一
益
と
も
成
り
な
ば
老
の
幸
何
の
歡
か
し
らん
や
と
文
化
十
の
壬
辰
夏
末
の
四
日
筆
を
染
め
侍
る
の
み

